

國語

〔共通問題〕

〔一〕 次の文章は『クリティカル・ワード 文学理論』に収録された三原芳秋「読む」の一部である。これを読み、後の問いに答えなさい。

まず、はつきりしておきたいのは、作品を読むとは作品と出会うこと（encounter）であり、出会いとしてそれは、深い意味での一つの歴史的经验に他ならないという点である。経験はたえず期待を裏切り、あらかじめ用意された方法や理論をのりこえたり、そこからほれ落ちたりする。

「まず、はつきりしておきたい」などと、いきなり啖呵^(x)を切られて驚いたかもしれないが、実はこれは本章の担当者自身のことではなくて、西郷信綱という古典学者が名著『古事記注釈』の冒頭においたマニフェスト的な序文「古事記を読む——〈読む〉ということについて」のなかの一節である。〈読む〉とは〈出会う〉の経験にほかならない、などと言ってはあまりにナイーヴに聞こえるだろうが、これにフランスの思想家ジル・ドゥルーズの以下の断言を重ねれば、ここで言いたいことはほぼ尽くされているように思える——「世界のなかには、思考せよと強制するなにかが存在する。このなにかは、基本的な出会う^(y)の対象であって、サイニン^(z)の対象ではない」（『差異と反復』）。

〈読む〉とは〈出会う〉こと——と言ってみたところで、国語の試験では「正解」を強制され、インターネット上では「まとめサイト」や「知恵袋」にクリック一つで「アクセス」を誘導される現代にあつて、〈読む^(a)〉ことを真に〈出会う〉として経験するのは極めて困難になっているのが、実際のところだろう。とはいえ、そんな時代にあつても、みごとに〈読み⁽¹⁾〉がヒロウされている（批評）作品を読むことによって〈出会う〉を追体験するという幸運に恵まれることは、しばしばある。たとえば、誰もが知っている松尾芭蕉の有名な句

古池や蛙飛こむ水のおと

これはあまりに有名すぎて、はたしてこの句をはじめ目に／耳にした——文字通り「出会った」——のがいったいいつ・どこでの出来事だったのか、思い出せる人はほとんどいないだろう。そんな「〈出会う〉不可能」とでも呼びたくなる「古池や」の一句にたいして、長谷川權という現代の俳人——俳句を詠む^(u)＝読む^(u)人——が、目の覚めるような〈読み〉を展開した。「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」という通常の解釈には、その意味づけに多少のノウタンはあれ、まったく疑問の余地がないように思われるが、現代の俳人はその三百年來の解釈を真つ向から否定し、「古池に蛙は飛びこまなかった」と推論する。しかもそれは、キをてらつたたんなる思いつきではなく、根拠にもとづく〈批評〉のか

たちをとっているのである。「蛙飛びこむ水のおと」の七五がまず得られたあとに「古池や」の上五をいくつかの候補のなかから選びだしたという事実を弟子の手記から見いだしたうえで（実証的根拠）、「古池に」ではなく「古池や」という切字きれじを用いたことの A 意義への洞察を加えることによって、この五七五にあるのは一続きの現実描写ではなく、「蛙飛びこむ水のおと」という現実世界の音が（現実にはない）「古池や」という〈心の世界〉の扉を開いた——すなわち、ふたつの異なる次元がこの五／七五において切り結んだ（＝出会った）、というザンシンな〈読み〉が示されたのだ。しかも、これを「古池や」一句の個別的な分析に留めずある種のジャンル論として発展させ、「芭蕉開眼」——俳句の世界における「蕉風」と呼ばれるひとつのジャンルの確立——の意味を確定し、それ以降に現れる「古池型」の句の〈読み〉に応用する。たとえば、「古池や」に負けず劣らず有名な

閑さや岩にしみ入蟬しずか　いるせみの声

は、『奥の細道』（二七〇二年）の後半、山形の立石寺で詠まれた句だが、ここでも「閑さのなかで岩にしみ入る蟬の声を聞いた」という B な解釈を否定し、

芭蕉はこのとき、「岩にしみ入蟬の声」をきっかけにして急に開けた「閑さ」に驚いたのである。一つの音によって別の音の不在に気がつく。芭蕉は岩山の上で「岩にしみ入蟬の声」を聞いて天地に広がる「閑さ」に気がついた。その驚きこそがこの句の「閑さ」だった。（長谷川權『古池に蛙は飛びこんだか』）

と〈読む〉。いわば、俳聖芭蕉が五／七五のなかに〈詠み〉こんだ、岩山のうえで異次元と〈出会った〉ことの驚きという仕掛け花火に、三百年後の〈読み〉＝〈出会い〉が点火し、そこから飛び散る火花が肌に触れた際に生じる驚きおどろきが、その〈読み〉を〈読む〉わたしに「思考せよ」と強制したのだ。こういった〈読む〉＝〈出会い〉ことの連鎖を、先ほどのフランスの思想家ならば「電源に接続するような読み方」とでも表現することだろう。

ところで、「驚きおどろきは哲学のはじまり」とは、よく言われる決まり文句であるが、ここでは、西洋近代哲学——「思考する」（わたし）からはじめる哲学——の祖ともいえるデカルト注の『情念論』（一六四九年）から、「驚き」にかんする一節を紹介したい。

なんらかの対象と初めて出会うことで、わたしたちが不意を打たれ、それを新しいと判断するとき、つまり、それ以前に知っていたものや、

あるべく想定していたものとはなはだ異なると判断するとき、わたしたちはその対象に驚き、激しく揺り動かされる。それは、対象がわたしたちに適したものかそうでないかまったくわからないうちに起こるので、驚きはあらゆる情念のうちで最初のものと思われる。しかも、驚きには反対の情念がない。現れる対象のなかにわたしたちの意表をつくものが何もなければ、わたしたちはまったく動かされず、情念なしにそれを見つめるからだ。(デカルト『情念論』谷川多佳子訳)

(中略) あらゆる差異との〈出会い〉は驚きであり、その経験において〈わたし〉は「激しく揺り動かされる」ことによって「異なる思考」へと強制される——これが、〈出会い〉としての〈読む〉こと(キ)のシンコッチョウであると言えるだろう。バーバラ・ジョンソンは、これを「他者の驚き≡不意打ち」と名づけ——「他者の驚きが生まれ、他者に不意打ちされるのは、無知が新しい形式をまとして、いきなり活性化し、ある種の命令となってたちはだかる瞬間である」——さらに一歩踏み込んで、「読者に課せられた不可能だが不可欠な務めとは、驚き≡不意打ちに自分自身を開くことである」とカッパ(ク)している(『差異の世界』)。

しかしながら、「激しく揺り動かされる」ことは〈わたし〉のアイデンティティにとって危機的な事態でもある。だからこそデカルト自身も、「驚き」がわたしたちを「知識の獲得」に向かわせるという利点を認めつつ、「後には、できる限りこの傾向から逃れるよう努めなければならぬ」と警告したのだった。こういった危機に向き合うことを好まず、むしろあらかじめそれを回避するために、〈読む〉≡〈出会う〉経験にあたかも「驚き」がそもそもなかったかのようにふるまう(「そんなこと、はじめからわたしにはわかっていた」といった、また別種の〈読み〉のスタイルが発動されることがしばしばある。これは〈出会い〉の驚きにたいする自己防衛のメカニズムであるが、それはまさに、エドワード・W・サイードが批判的に取り組んだ「オリエンタリズム」をよく説明するものである。その画期的な大著『オリエンタリズム』(一九七八年)の「危機」と題された節の冒頭、サイードは「テクスチュアルな姿勢」という耳慣れない表現をもちだし、「人間的なものと直接に遭遇(Encounter encounters)して方向を見失うよりも、むしろ書物の図式的な権威によりかかろうとするのは、人間にツウユウの欠点であるように見うけられる」との見解を呈示する。〈出会い〉による動揺・方向喪失を回避するために、旅行記やガイドブックといった書物にあらかじめ用意された〈読み〉に飛びつく傾向は、誰にでもたしかにあることだろう。この「人間にツウユウの欠点」が西洋帝国主義の文脈で集合的な言説としてどのような力をふるってきたのかを詳細かつ広範に分析したのが『オリエンタリズム』という書物なのである。西洋が東洋との〈出会い〉を経験し、その差異≡他者性をまっさらな眼(メ)で〈読む〉ことに努めてきた、その努力の集積が「オリエンタリズム」と総称される一連の(文学・絵画などの)作品群である——といった通念をサイードは真つ向から批判し、「オリエンタリズムとは、西洋が東洋の上に投げかけた一種の投影図であり、東洋を支配しようとする西洋の意志表明」以外のなにものでもなく、「オリエンタリズムはオリエントを踏みにじったのである」と告発する。ここで注意しなければならないのは、帝国／植民地体制という圧倒的に不均衡な権力関係において〈出会い〉を回避するため

に「読む」という行為は、たんなる自己防衛と呼んで済むものではなく、むしろ「征服の修辭学」とでも呼ばれるべきものである、ということだ。原住民と「出会う」ことが帝国による一方的な征服・支配の正当性をゆるがしかなないとき、その「出会い」をあらかじめ回避するようにして相手を都合よく「読む」ことは、すなわち、「征服・支配のために「読む」という帝国主義的实践にほかならない。そして、こういった暴力的「読み」の実践は、けっして帝国主義の時代に限られる過去の悪習といったものではなく、「正しい読み方」を強制する入試問題や「〇〇イズム批判」が得意とする「非難のレトリック」といったかたちで、実はわたしたちのまわりでそれこそ「支配的」な存在感をいまだにもっているのである。

「非難のレトリック」にオチイることなく「征服・支配のための「読み」」を「批判 (critique)」する方法としてサイドが『文化と帝国主義』(一九九三年)において案出・実践した、またひとつの「読み」のスタイルが「対位的読解」である。これは音楽における対位法から着想を得たものだが、その前提には、テキストは(それがテキストである以上)かならず多声的である(ミハイル・バフチン)という認識がある。多声的であるということは、「作者の意図」や「〇〇イズムの反映」といった(単一の意味)に収斂するような単声的読解を退けるということである一方で、それぞれの声がてんでばらばら「なんでもあり」とはならずゆるやかな関係性を保っているということも意味している。ここで、美しい図柄の描かれた織物を思い浮かべてみよう。きつとわたしたちは、その美しい図柄を眺めながら、そこに「意味」や「価値」を「読む」ことに熱中するにちがいない。しかし、誰かがふと、少々不躰なほどに目を近づけてみると、それまでは図柄の輪郭をなす一本の線と見えていたものが、実はさまざまな色や太さの縦糸・横糸が絡まり合い重なり合っていることに、はたと気づくこともあるかもしれない——書物と織物とは、ともにラテン語の *texere* 「織る」という動詞を根にしていることを、ここで思い出してみるのもいいだろう。「対位的読解」とは、(征服・支配のための意味づけ・価値づけによって)見えなくされていた、あちらの糸とこちらの糸との意外な関係性を発見・発明し、ひいては支配的言説を「批判」することへとつながっていく実践のことである。サイドの場合、イギリス小説を「読む」ことによって「絡まり合い重なり合う歴史」を解きほぐすことが目指されたわけだが、Cには、たとえばジェイン・オースティンの『マンスフィールド・パーク』(一八一四年)といういかにも「イギリス的」な田舎の莊園を舞台にした、恵まれない家庭出身の女兒がもちまへの堅実さと道徳心でさまざまな困難を乗り越え最終的には幸せをつかみとる物語としてながらく愛されてきた小説を、「対位的」に「読む」という実践例がある(「ジェイン・オースティンと帝国」)。この小説には、一見作品全体の「意味」には影響をあたえないような細部における西インド諸島アンティグアの植民地プランテーションへの言及があるのだが、サイドはそのわずかな糸口から作品の裏地をなす太い糸を手繰りよせ、この「イギリス的な、あまりにイギリス的な」小説／世界が実は植民地における奴隷労働によって維持される収奪システムの上に成り立っていること、そして、それがこの作品に必要な要素として織り込まれているさまを解き明かしたのだった。

(三原芳秋「読む」による。なお、小見出し及び引用の出典表記や注の一部を省略した。)

- (注1) ジル・ドゥルーズ……フランスの哲学者（一九二五～一九九五）。
- (注2) デカルト……フランスの哲学者（一五九六～一六五〇）。『情念論』はその著書。
- (注3) バーバラ・ジョンソン……アメリカの文学研究者（一九四七～二〇〇九）。
- (注4) エドワード・W・サイード……アメリカの文学研究者（一九三五～二〇〇三）。パレスチナ出身。
- (注5) 多声的……もと音楽用語で、複数の音が同時に響きあう性質をいう。
- (注6) ミハイル・バフチン……旧ソヴィエト連邦共和国の文学研究者（一八九五～一九七五）。
- (注7) ジェイン・オースティン……イギリスの小説家（一七七五～一八一七）。

問一 傍線部(ア)～(コ)のカタカナで表記された語句と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解
答番号は

1

 ～

10

。

(ア) サイニン

1

- ① カンニンブクロの緒が切れる
- ② ハイニンの疑いで告発される
- ③ 罪に問われても彼はヒニンした
- ④ ゼンニンぶるのは良くない
- ⑤ ニンシン中の女性に席を譲る

(イ) ヒロウ

2

- ① 朝市のロテンを訪れる
- ② 質問に対し、メイロウな回答を得た
- ③ 将来のためにロウヒしないようにする
- ④ 時季外れのものはカロトウセンと言われる
- ⑤ ロウクをいとわず引き受ける

(ウ) ノウタン

3

- ① 言葉のハシバシにみられる気遣い
- ② 責任をともなう役割をニナう
- ③ 山村に伝わるスミヤきの技術
- ④ 帯にミジカしたすき襷に長し
- ⑤ アワい恋心を抱く

(エ) キをてらった

4

① 勝利にカンキする

② シンシュツキボツの行動に戸惑う

③ 意地の悪い質問に対してもキチに富んだ応答をする

④ こんなところで会うとはキグウなことだ

⑤ カイキニツシヨクの観測に成功する

(オ) ザンシン

5

① ザンテイ税率が廃止される

② タイザンメイドウして鼠^{ねずみ}一匹に終わる

③ アンザンを祈願する

④ 江戸時代にはザンシュ刑が存在した

⑤ 早春のザンセツを溶かす雨

(カ) ツく

6

① 財産はムジンゾウにあるわけではない

② キフ金を集める

③ チャクジツに成果を上げる

④ 会長にシュウニンする

⑤ トツシュツした好成績

(キ) シンコツチヨウ

7

① ダンチヨウの思いで引き返す

② 朝からブツチヨウヅラは見たくない

③ 先輩にブチヨウホウをお詫^わびする

④ チヨウジヨウ現象の謎を解く

⑤ 学力のシンチヨウを目指す

(ク) カッパ

8

- ① 海外にハケンされる
- ② ハゲキが腫れる
- ③ ハスウを切り捨てる
- ④ 適度なハキユウ効果を期待する
- ⑤ ハテンコウな人生を歩む

(ケ) ツウユウ

9

- ① ユウケイムケイの遺産
- ② 東西文化のユウゴウ
- ③ ユウキユウの彼方^{かなた}
- ④ ユウガタに帰宅した
- ⑤ ユウシヨウレットパイの法則

(コ) オチイ

10

- ① 医師のカンコクに従って薬を控える
- ② カンドコロを押さえて批評する
- ③ 梅雨のカンゲキを縫って太陽が顔を出す
- ④ 彼女の理論にはケツカンが見当たらない
- ⑤ 事務所にカンヨウ植物を置く

問二 傍線部 (X)「啖呵を切られて」、(Y)「ナイーヴ」、(Z)「はたと」の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11 } 13。

(X) 啖呵を切られて
 ① 攻撃的な姿勢で怒鳴りつけられて
 ② 威勢の良い口調で強く言われて
 ③ 難解な文言で圧倒されて
 ④ 感情的な語調で非難されて
 ⑤ 巧みな表現で言いくるめられて

11

(Y) ナイーヴ
 ① 気恥ずかしいこと
 ② 気取っていること
 ③ 的外れであること
 ④ 優しげであること
 ⑤ 素朴であること

12

(Z) はたと
 ① しきりに
 ② しだいに
 ③ とつぜん
 ④ あわてて
 ⑤ 意外に

13

問三 空欄 A } C に入る言葉として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。ただし、全て異なる言葉が入る。解答番号は A は 14 ・ B は 15 ・ C は 16。

- ① 具体的
- ② 修辭的
- ③ 否定的
- ④ 通俗的
- ⑤ 打算的
- ⑥ 懷疑的

問四 傍線部(a)「読む」ことを真に〈出会い〉として経験するのは極めて困難になっている」とあるが、「極めて困難」であるのはなぜか。その理由として**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17。

- ① 国語の教科書に掲載されている作品が定期試験で出題される場合は、授業で教師が示した読み方に沿って解答することが要求されるため。
- ② インターネット上の他者が編集した情報をきっかけにして小説を知ることが増え、先入観なしに小説を読むことが少なくなったため。
- ③ 課題の感想文を書く前に、何をポイントとして書けばよいのかをインターネット上のサイトで尋ねると、見知らぬ人が回答してくれるため。
- ④ 一冊の書物と本当に出会ったと言えるのは、作者について深く知ったときであるが、作者のことを知るには個人情報の問題が障壁となり得るため。
- ⑤ 特に有名な作品については、誰かがすでに説得力のある読み方を提示しており、それらの解説にたどりつくことが容易であるため。

問五 傍線部(b)「根拠にもとづく〈批評〉のかたちをとっている」とあるが、「根拠にもとづく〈批評〉」的行為の例として**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① 総理大臣が、専門家から収集した情報を吟味した上で一つの政治的判断をおこない、自らの政治的判断の理由と背景をデータに基づき国民に対して説明したこと。
- ② 小学生が、自分のつかまえた昆虫が新種であることを、各種の図鑑を調べて確認し、周囲の協力を得ながら資料をまとめて学会に提出したこと。
- ③ 大学生のグループが、研究室の実験記録を洗い出し、再現性の有無を検証し、それまで提示されてこなかった仮説を卒業研究で唱えたこと。
- ④ 太宰治の『津軽』における「私」が、旅の道すがら池のほとりで蛙が飛び込む「チャボリ」という音を聴いて、「在来(ざいらい)の風流(ふうりゅう)の概念の破壊」を読みとったこと。
- ⑤ 独学で学んだ科学者が、実験を重ねて得られた結果を学会で発表し、そこで認められた学説をテレビで視聴者にわかりやすく解説した

問六 傍線部（c）「旅行記やガイドブックといった書物にあらかじめ用意された〈読み〉に飛びつく」とあるが、「旅行記やガイドブック」以外で「あらかじめ用意された〈読み〉に飛びつ」いた例として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- ① これまで食べたことのない食材を手に入れたので、自分で考えてさまざまな調理法を試してみた。
- ② 接客の際にどんなアクシデントが起こっても従業員たちが対応できるよう、業務マニュアルを作成して配布した。
- ③ 久しぶりに会った旧友の手柄があまりに変わっていたので、心理学の本を読んで理由を理解しようとした。
- ④ 美術館で絵画の鑑賞をする際、設置された解説パネルを無視し、衝撃的な色づかいの作品に見入っていた。
- ⑤ 外国語で書かれた文学作品を読もうとしたが、辞書を引くのが面倒で、すぐ投げ出してしまった。

問七 傍線部（d）「〈単一の意味〉に収斂するような単声的読解」とあるが、「単声的読解」とはどのようなものか。その説明として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- ① 作者が主に依拠していた思想や立場を特定し、それ以外のものが含まれているかどうかで作品の価値を決めていくような読み方。
- ② 作者の執筆時の生活を細かく調査し、それを特定の思想や立場からみて評価できるかどうかで作品の価値を決めるような読み方。
- ③ 執筆中に現れる作者の様々な考えや思いが、作品内でゆるやかな関係性を持っていることを証明していくような読み方。
- ④ 作者の執筆時に持っていた意思が、社会に受け入れられる思想を反映しているかどうかで作品の価値を決めるような読み方。
- ⑤ 作者の意図や思想を明らかにし、それらが一定の統一感をもって作品に表れていることを検証していくような読み方。

問八 傍線部(e)「対位法的」に〈読む〉とあるが、「対位法」とは音楽用語で、複数の独立した旋律を調和しあうように重ねて楽曲を作る作曲方法のことである。「対位法的」な読み方とはどのようなものか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 21。

- ① 作品の表面には出てこない地味な要素であっても、表面で起こっている一連の出来事の流れの中に置きなおしてとらえなおすことにより、作品における新たな意味を見出す^{みいだ}という読み方。
- ② 作品の作者にとってはささやかで些^さ末^{まつ}な要素であっても、読者がその作品の主要な部分と深い因果関係があるものとして意識して再考することで、作品における新たな意味を見出すという読み方。
- ③ 作品の主要登場人物のあり方に強く影響を与える要素ではなくても、それぞれの人物の成長の過程をつぶさに追う中でその要素をとらえなおし、作品における新たな意味を見出すという読み方。
- ④ 作品の本筋とは一見無関係に見える要素でも、他の部分と関わらせて解釈することで本筋全体に関わる不可欠な要素としてとらえなおし、作品における新たな意味を見出すという読み方。
- ⑤ 作品の全体的な世界観の中では重要な問題になっていると見える要素ではなくても、現実的な問題とからめて位置づけなおすことで、作品における新たな意味を見出すという読み方。

問九 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 22。

- ① 作品を読むということは、読者がそれまで無意識に備えていた自己の考えなどを再確認し、アイデンティティを発見して、人生にかすことである。
- ② 作品を読むということは、読者が登場人物や物語世界に自己を投影して、自由な想像と解釈を巡らし豊かな読みを求めて感性を高めていくことである。
- ③ 作品を読むということは、読者が音楽を聴くのと同様に多くの声を同時に聴くことであり、理論や方法に依拠せずに作品そのものを楽しむことである。
- ④ 作品を読むということは、読者が納得するような読み方を発見していく合意形成のプロセスであり、多くの人々の協力に基づく共同作業である。
- ⑤ 作品を読むということは、読者がそれまで意識していなかった領域に出会い、アイデンティティを根底からゆるがされるような想定外の経験である。

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

幼稚園児以来の記憶を辿^{たど}つていくと、ヒシバッタも、オオスカシバの蛹^{さなぎ}も、茗荷^{みよなが}の根本の大ミミズも、私が見ているように、かつ鮮明に思
い出される。これは、一般的に心理学で言われていることから推察すると、実は、少し異常な事態なのである。

当時の自分自身が見ているように情景が思い出されることを、一人称的記憶と呼ぶ。これに対して、自分自身が映画の登場人物のように見え
る情景の思い出し方を、三人称的記憶と呼ぶ。近年の心理学は、最近のこと、新しい記憶は一人称的記憶として思いだされ、昔の自分の小さい
頃の記憶は三人称的記憶として思い出される、という現象を実験的に示している。新しい記憶は、直接画像のように蓄えられ、それが記憶の倉
庫から呼び出されるから、自分の体験した風景のように思い出され、一人称的になる。対して、古い不確実な記憶などは、何らかの形で

〔A〕 されて記憶されており、そこから思い出すときに再構成されるから、三人称的になると考えられている。

そこから考えてみると、幼稚園児の頃の古い記憶が、一人称的に、鮮明に蘇^{よみがえ}ってくるという事態は、異常であるということになる。しかし、
私の研究室では記憶が一人称的か三人称的か多くの人で調べてみたが、一般的傾向が認められるというより、人によってかなり異なるというこ
とがわかってきた。そこで今では、むしろ、人ごとに記憶の人称性〔B〕を調べるべきだろうと考えている。

ヒシバッタや、オオスカシバの蛹は、自分の体験であり、自分の記憶なので、その記憶の風景や質感も、よくわかっている。それはたしかに、
一人称的なのだが、ヒシバッタや、オオスカシバの蛹だけが、リアルに鮮やかに思い出され、体験している感じともまた違う気がするのだ。た
しかに、そのときの周りの風景、茗荷の林や、地面にたくさん落ちている未熟の小さな柿、植木鉢の並んだ風景なども思い出されるが、それら
は画面の周囲がぼんやりとする感じで、パッチワークのように風景を構成している。それに対して、ヒシバッタや、オオスカシバの蛹は、極め
て鮮明で、そのパッチワークの中心に位置するのである。

一人称的風景は、特定の固定された視点、「わたし」の視点から見た風景だ。これに対して三人称的風景は、どこからでも見ることできる
モデル的風景である。だから、一人称的風景は経験されたもので、三人称的風景は〔C〕なもの、作られたものだということがわかる。

つまり、一人称的風景がぼんやりしながら、パッチワーク状に全体を構成するというのは、断片的で不完全な一人称的記憶から三人称的記憶
を作り出そうとする過程であり、一人称と三人称を同居させようとする過程であると思われる。その中心に位置するヒシバッタや、オオスカシ
バの蛹は、だから、純粹な一人称ではなく、むしろ際立って一人称的でありながら、三人称の中心でもあり、アイコン（ギリシャ正教会で用いら
れる聖母子像などの画像、転じてコンピュータのアイコンなど、象徴的な画像的記号）のような記号にもなっている。

だとすると、その鮮明さは、記憶の鮮明さというよりも、三人称的記号の明晰さではないか。その意味で、それは、一人称的記憶と三人称的記憶を共に肯定する、肯定的矛盾に位置づけられるのではないか。その可能性を考えてみようと思う。

一人称的記憶と三人称的記憶との肯定的矛盾の可能性は、拒食症や過食症のメカニズムと考えられるものの中にも見出されてきた。自分の肉体がどのような身体であるかという自分の中に持つイメージを身体イメージというが、それにもまた一人称的身体イメージと三人称的身体イメージとがある。

当事者として観察する自分の肉体は、通常見ることができると腕や足、上から見下ろした胸や肩口、あとは鏡で見る顔や背中ということになる。いずれにせよ、その全体を俯瞰してみることが不可能だ。このような「わたし」から見た身体イメージは、自己視点身体（一人称的身体イメージ）と呼ばれている。これに対し、いかなる視点からも見ることができると仮想的身体イメージもあって、これは他者視点身体（三人称的身体イメージ）と呼ばれている。

拒食症や過食症のメカニズムの一つとして、「他者視点断絶」という仮説が提唱されている。通常、人は、自己視点身体と他者視点身体との両者の相互作用がうまくいっており、新たな自己視点身体の情報によって、他者視点身体が更新され、他者視点身体で予測しながら、自己視点身体の情報を取り込む操作をしている。ところが何らかの原因で、自己視点身体と他者視点身体との連結が切れてしまうことがある。「自分は太っている」といったストレスが、その原因になることもあるだろう。

こうなると、太っていた身体イメージの他者視点身体が固定され、ずっと記憶されることになる。いくら食べるのをやめ、痩せていく自分の姿を鏡で見ても、その自己視点身体の情報、他者視点身体を更新することはないからだ。結局、いくら痩せ、鏡でそれを見ていても、いざ食べるときには、他者視点身体のイメージ（「自分は太っている」）がその人を支配し、食べることを拒否してしまう。拒食は、負のループに入り込み、加速していくというわけだ。同様に、他者視点断絶によって、「自分は痩せている」という他者視点身体が固定されるとき、過食症が起ると考えられる。

私は、「他者視点断絶」に概ね同意するものの、自己視点身体と他者視点身体との両者が安定的に存在し、健康である限り、二つの身体の連絡がうまくいく、という議論には賛同しかねる。そして、そこから、「他者視点断絶」は大きく意味を変えていくと考えられる。もともと他者視点身体は仮想的で、自己視点身体のパッチワークと、観察できない部分を推定し補うことで作られるものだから、それ自体完全なものではない。とすると、他者視点身体は完璧に真であるという情報ではないだろう。

自己視点身体が、どのように変化したかを推察し、どの部分に注目するかを決めるためには、他者視点身体に基づかねばならない。しかし、その他者視点身体に全幅の信頼が持てないわけだ。逆に他者視点身体を構成するには、自己視点身体の取捨選択や、断片的身体情報間の調整が必要になるから、自己視点身体を無条件に取り込むわけでない。したがって、自己視点身体と他者視点身体の間には、齟齬、軋轢があつて然る

べきである。それは病的な状態ではなく、むしろ常にそのような状況にあると考えるべきだろう。

その上で、「他者視点断絶」を再解釈してみる。断絶は、健全に描写された自己視点身体と他者視点身体とがあつて、その上で、両者の間に断絶があるのでなく、他者視点身体の弱体化であると思われる。そのきっかけとなる「自分は太っている」という身体イメージは、二つの身体イメージを媒介する、重要な役割を果たしている。

すなわち、「自分は太っている」という身体イメージは、⁽²⁾それ自体の性格として、生き生きとした自己視点身体でありながら、構成された、仮想の他者視点身体でもあり得るもので、両者の齟齬から生まれた結び目と考えられる。絡まった糸の結び目は、異なる糸のねじれの拮抗^{きっこう}の果てに、ねじれを解消しようとして逆にねじれを構造化してしまう。もちろん、「自分は太っている」がそのような明確なイメージとして形成される原因にはさまざまな要因があるだろう。重要な点は、通常のいかなる生活においても、自己視点身体と他者視点身体との齟齬は潜在しており、何らかの原因で結び目ができることはいくらでも起こり得るということだ。それは決して特殊で異常なことではない。

自己視点身体と他者視点身体は異質な概念で、本来、両立し得ないものだ。つまり「自分は太っている」は、両者を共に受け入れる肯定的矛盾である。同時に、それは機能的に自己視点身体と他者視点身体とを共に否定し、否定的矛盾も成り立たせる。第一に、自己視点身体を部分情報としてパッチワークし、補完し、部分間を調整し、他者視点身体を形成することが難しくなる。それはおそらく、結び目としての「自分は太っている」というイメージが、ある意味、強力な指導力を発揮してしまうからだろう。「自分は太っている」というイメージは、アイコンとして他者視点身体形成の現場に制約としての強制力を持ち、まるで設計図のように振る舞う。だから、他者視点身体形成の健全なアップデートは、著しく阻害されることになる。

第二に、自己視点身体も否定される。これはまさに「他者視点断絶」の要点でもあったわけだが、「自分は太っている」というイメージが、象徴的記号として振る舞い、いくら鏡で確認しても、自己視点身体を否定し、受け入れないわけだ。したがって、「自分は太っている」という身体イメージは、他者視点身体も自己視点身体も否定し、否定的矛盾を形成することになる。まとめると、「自分は太っている」は、その性質において二つの身体イメージを共に肯定する肯定的矛盾の体現者であり、機能として二つの身体イメージを否定する否定的矛盾を形成するもの⁽³⁾だと言える。つまりそれは、トラウマ構造そのものである。

自己視点身体と他者視点身体とが健全なままに担保され、それが切断されるという意味での「他者視点断絶」は、コントロールされた機械の異常のようで、自然な仮説とは考えがたい。現実の脳や意識はもつと動的で、論理的に考えると矛盾だらけのシステムだろう。その意味で、二つの身体イメージの齟齬が結び目となるような、状態として二つの身体を共に肯定し引き受ける「自分は太っている」イメージが、機能的に両者を否定し、抑圧するという動的な過程は、より自然な仮説と言えるだろう。

身体をイメージ記憶に置き換えることで、一人称的にヴィヴィッドで、三人称的に象徴的・アイコン的な身体イメージ——「自分は太ってい

る」——は、一人称的にヴィヴィッドで、三人称的に象徴的・アイコン的なイメージ記憶に置き換えられることになる。それこそ、ヒシバッタや、オオスカシバの蛹のイメージ記憶である。つまりそれは、純粹な意味での一人称的記憶や、三人称的記憶を両義的に有したものであると同時に、それらを共に否定し、脱色するものなのである。日常とは、一回きりの一人称が反復することだ。つまり日常は、経験的でありながら、繰り返し可能な理念とみなされる。だから、日常とは一人称であり三人称である。ヒシバッタや、オオスカシバの蛹は、⁽⁴⁾それ自体が日常の象徴でありながら、日常を脱色するものなのである。

(郡司ペギオ幸夫『創造性はどこからやってくるか』による)

問一 空欄 A に入る言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 23。

- ① 部分化、暗号化
- ② 自己化、単純化
- ③ 抽象化、記号化
- ④ 単純化、部分化
- ⑤ 記号化、暗号化

問二 空欄 B に入る言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 24。

- ① 思い出すことが、相対的に個性的な経験であるかの度合い
- ② 思い出す主体が、一人称、二人称、三人称のいずれであるか
- ③ 思い出すことが、どのくらいリアルで鮮やかに感じられるか
- ④ 思い出す主体が、思い出される対象の人称と重なりあう度合い
- ⑤ 思い出すことが、相対的に一人称的か三人称的かの度合い

問三 空欄 C に入る言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 25。

- ① 想像的で空想的
- ② 理念的で仮想的
- ③ 人工的で作為的
- ④ 客観的で構造的
- ⑤ 模型的で模範的

問四 傍線部(1)「拒食症や過食症のメカニズム」に関して、筆者の考えに最も近いものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答

番号は 26。

- ① 拒食症や過食症は、一人称的身体イメージと三人称的身体イメージに引き裂かれ、ネガティブ思考から抜け出せなくなることで、精神上の均衡を喪失してしまう現象である。
- ② 拒食症や過食症は、本来は均衡が取れている一人称的身体イメージと三人称的身体イメージがバランスを失い、両者の交流的な関係が断絶するに至ってしまう現象である。
- ③ 拒食症や過食症は、一人称的身体イメージと三人称的身体イメージの相互作用が機能不全となり、後者が前者に対して支配的な位置を占めるようになってしまう現象である。
- ④ 拒食症や過食症は、一人称的身体イメージと三人称的身体イメージの矛盾を引き受けることが自己への抑圧として働き、他者視点の身体イメージが後退してしまう現象である。
- ⑤ 拒食症や過食症は、一人称的身体イメージと三人称的身体イメージの間に齟齬や軋轢があまりに大きくなりすぎて、自縄自縛の状態から脱出できなくなってしまう現象である。

問五 傍線部(2)「両者の齟齬から生まれた結び目と考えられる」とあるが、これはどういうことか。その説明として最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 27。

- ① 自己視点による身体イメージにせよ、他者視点による身体イメージにせよ、それ自体として完全に正しいものではありえない。したがって、「自分は太っている」という自己認識もまた、両者の不正確な断片的情報から仮想的に構築されたものにほかならず、結果としてさまざまな矛盾や軋轢を抱え込んでいるものと考えられる。
- ② 自己視点による身体イメージが形成されるためには、他者視点による身体イメージからの取捨選択が不可欠であるのと同様に、他者視点による身体イメージの構築には、自己視点による身体イメージが必要である。それゆえに、「自分は太っている」という自己認識は、本来は異なる身体イメージの調整の結果として生まれたものと考えられる。
- ③ 「自分は太っている」という自己認識は、あまりに強くなりすぎると、自己視点による身体イメージとも他者視点による身体イメージとも合致しなくなることがある。そのため、鏡を見てもそれが自分の身体であると受け入れることが難しくなることと、他人からの意見や観点を受け入れられなくなることとは、表裏一体の現象だと考えられる。
- ④ 自己視点による身体イメージと他者視点による身体イメージの間の相互作用が機能しているうちは、矛盾が顕在化することはないが、両者のバランスが崩れると、その矛盾があらわになる。「自分は太っている」という自己認識はその例であり、ふたつの身体イメージが本質的に抱えている矛盾が表出したものと考えられる。
- ⑤ 自己視点による身体イメージと、他者視点による身体イメージは、二律背反的な性格をもっているため、本来は混じり合うことがない。しかし、両者が矛盾を抱えこみながらも接点をもつことによって「自分は太っている」という自己認識が構築されるやいなや、それは自己に対する象徴的記号として振る舞い始めてしまうと考えられる。

問六 傍線部(3)「トラウマ構造」は、同書の別の箇所で「二項対立的なものが、そこから抜け出せない閉域のように『わたし』を支配しているとき、対立する二項を共に成り立たせる肯定的矛盾と、共に否定する否定的矛盾が共立すること」と定義されている。この趣旨に照らして、「トラウマ構造」からの脱出の事例として最も適したものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 28。

- ① 恋に落ちたあと、偶然の出会いを必然であると思ひ込むようになること。
- ② そばを食べるかラーメンを食べるかで悩み抜いた末に、帰って寝ること。
- ③ 人間が作り出した人工知能によって、人間の仕事が奪われてしまうこと。
- ④ 年末にクリスマスを祝い、年始には社寺へ赴き神仏に願掛けをすること。
- ⑤ 両親が正反対の意見で対立しているとき、双方の意見に耳を傾けること。

問七 傍線部(4)「それ自体が日常の象徴でありながら、日常を脱色するものである」とあるが、これはどういうことか。本文全体の趣旨に照らして、最もふさわしい説明を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 29。

- ① 幼少期に見た昆虫や植物のありようは、一人称的に回想可能な鮮明さを持ちながら、三人称的な視点から語りうる記号的な記憶ともなっているがゆえに、日常の両義性を象徴しつつ、純粋な日常を全面的に肯定するということ。
- ② 幼少期に見た昆虫や植物のありようは、三人称的に反復される一般的事象でありながらも、一回的で特異な一人称的体験でもあるがゆえに、両立しないふたつの視点をともに否定しつつ、日常そのものを異化するということ。
- ③ 幼少期に見た昆虫や植物のありようは、一人称的なイメージ記憶であるだけでなく、三人称的なイメージによって補完された仮想的な構築物であるがゆえに、日常の断片でありながらも、色彩が失われてしまうということ。
- ④ 幼少期に見た昆虫や植物のありようは、他者には決して体験できない秘匿的なものであるがゆえに、一人称的に語られる記憶イメージは、自己存在の特異性を証明しつつ、ありのままの純粋な日常の尊さを示しているということ。
- ⑤ 幼少期に見た昆虫や植物のありようは、三人称的で客観的な存在として記述可能でありながらも、体験そのものは一人称的であるがゆえに、現実には存在しないパッチワーク的記憶として、日常を仮想的に再構成するということ。

〔二〕〈古文〉 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

また、

A 「この世に、いかでかかることありけむと、めでたくおぼゆることは、文こそはべれな。『枕草子』にかへすがへす申してはべるめれば、こと新しく申すに及ばねど、なほいとめでたきものなり。はるかなる世界にかき離れて、幾年あひ見ぬ人なれど、文といふものだに見つれば、ただ今さし向かひたる心地して、なかなか、うち向かひては思ふほども続けやらぬ心の色もあらはし、言はまほしきことをもこまごまと書き尽くしたるを見る心地は、めづらしく、うれしく、あひ向かひたるに劣りてやはある。

つれづれなる折、昔の人の文見出でたるは、ただその折の心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。まして亡き人などの書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、年月の多く積もりたるも、ただ今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、かへすがへすめでたけれ。

何事も、たださし向かひたるほどのなさけかりにてこそはべるに、これは、ただ昔ながら、つゆ変はることなきも、いとめでたきことなり。いみじかりける延喜、天暦の御時のふること、唐土、天竺の知らぬ世のこと、この文字といふものなからましかば、今の世の我らが片端も、いかでか書き伝へましなど思ふにも、なほ、かばかりめでたきことはよもはべらじ。」

B 「何の筋と定めて、いみじと言ふべきにもあらず、あだにはかなきことに言ひならはしてあれど、夢こそ、あはれにいみじくおぼゆれ。はるかに跡絶えにし伸なれど、夢には関守も強からで、もと来し道もたち帰ること多かり。別れにし昔の人も、ありしながらの面影をさだかに見ることは、ただこの道ばかりこそはべれ。上東門院の『今はなき寝の夢ならで』と詠ませたまへるも、いとこそあはれにはべれ。」

（『無名草子』による）

〔注1〕『枕草子』に……「文」について、「めづらしと言ふべき事にはあらねど、文こそなほめでたきものには。はるかなる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、いかならむと思ふに、文を見れば、ただいまさし向かひたるやうにおぼゆる、いみじき事なりかし。」とある。

〔注2〕延喜、天暦の御時……「延喜」は醍醐天皇（在位八九七～九三〇）、「天暦」は村上天皇（在位九四六～九六七）のときの年号。後世からすばらしい時代と仰がれた。

〔注3〕上東門院……藤原彰子（九八八～一〇七四）。一条天皇の中宮となった。

〔注4〕今はなき寝の夢ならで……一条天皇の崩御を悲しんで上東門院が詠んだ歌、「あふことも今はなき寝の夢ならでいつかは君をまたは見るべき」のこと。

問一 傍線部(1)「申すに及ばねど」、(4)「劣りてやはある」の現代語訳として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は(1)は 30・(4)は 31。

(1) 申すに及ばねど

- ① 申し上げるほど良くもないが
- ② 申し上げることに限らないが
- ③ 申し上げるほどでないが
- ④ 申し上げることが難しいが
- ⑤ 申し上げるほど知らないが
- ⑥ 申し上げることに匹敵しないが

(4) 劣りてやはある

- ① 劣っているようだ
- ② 劣るのだろう
- ③ 劣っていたらしい
- ④ 劣っていない
- ⑤ 劣らないようにする
- ⑥ 劣らないようだ

問二 波線部(a)「じ」、(b)「る」の文法的意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。同じ番号を複数回用いてもよい。解答番号は(a)は 32・(b)は 33。

- | | | | |
|------|--------|--------|------|
| ① 受身 | ② 可能 | ③ 自発 | ④ 尊敬 |
| ⑥ 推量 | ⑦ 打消意志 | ⑧ 打消推量 | ⑨ 完了 |
| | | | ⑤ 使役 |
| | | | ⑦ 過去 |

問三 傍線部(2)「ただ今さし向かひたる心地して」の現代語訳として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 34。

- ① たった今、会っていた人のような気がして
- ② 今まさに、面と向かい合っている気がして
- ③ ついさつき、会ったことがある気がして
- ④ ちょうど現代において、重んじられている気がして
- ⑤ 今現在、正面に見据えられている気がして

問四 傍線部(3)「なかなか、うち向かひては思ふほども続けやらぬ心の色もあらはし、言はまほしきことをもこまごまと書き尽くしたる」とあるが、これは「文」のどのような特徴をいうか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 35。

- ① 思ったことをなまはんに言おうとすると本心があまりに露わになっあてしまい、細部まで注意して表現しなければ誤解を招くという特徴。
- ② 直接言おうとするとなかなか緊張して言えなくなることも落ち着いてゆっくり考えることができ、言いたいことが言えるという特徴。
- ③ 向かい合って話そうとすると言いづらいような気持ちも言うことができ、口頭によるよりも詳細に表現することができるといふ特徴。
- ④ 直接対面しているときは伝わりづらい思いであっても、文字を使って効果的に表現することができ、心をこめて伝えられるという特徴。
- ⑤ 当座はかえって記憶に新しいために言いづらい心情もあるものだが、文章として少しずつ綴つづることで思いを存分に表わせるという特徴。

問五 傍線部(5)「何事も、たださし向かひたるほどのなさけばかりにてこそはべる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 36。

- ① どんなことでも、今現在体験している間だけがしみじみ愛しく感じられるものだということ。
- ② どんなことでも、ただじかに見知っている者だけが思いやりをもつて接してくれるものだということ。
- ③ どんなことでも、直接向かい合っている間だけ情趣が感じられるものだということ。
- ④ どんなことでも、まっすぐ見ているものでなければ普通は情感を帯びて見えないということ。
- ⑤ どんなことでも、直接関わっている人でなければ人情味が感じられないということ。
- ⑥ どんなことでも、ちょうど今最も深い関わりを持つている者でなければ風流さを感じられないということ。

問六 傍線部(6)「はるかに跡絶えにし仲なれど、夢には関守も強からで、もと来し道もたち帰ること多かり。」とあるが、この「関守」とは、『伊勢物語』において、女のもとに通ってくる恋人の秘密の通り道を女の家族がふさいで通れなくした折、女が詠んだ歌、「人知れぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにも寝ななむ」による表現である。これを踏まえて傍線部(6)を解釈すると、どのような意味の表現とすることができるか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 37。

- ① とつくの昔に絶えてしまった仲でも、夢の中では恋を妨害する人もいないので、ふたたびかつての恋人の姿を見られることが多い。
- ② 遠く生き別れになってしまった夫婦仲でも、夢の中は関守を守る人も寝ていて監視していないので、再会して思いを告げることができる。
- ③ はるか昔に愛情を失ってしまった恋人でも、夢ではその愛情のほどをとにかく言う人はいないので、もう一度よりを戻せることが多い。
- ④ 別れてしまった恋人どうしであっても、夢の中の道はその恋文のやりとりを制する人がいないので、夢を介してよりを戻すことができる。
- ⑤ かつての思いがなくなったあとでも、夢には秘密の通路があるので、夢の逢瀬が正夢となつてかつての恋人と会えることが多い。

問七 次の①～⑤の説明は、本文中の会話文Aと会話文Bそれぞれの内容やそのやりとりの特徴を説明したものである。本文の内容に合致しないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 38。

- ① AもBも、目の前にないものをありありと見せてくれるすばらしさを「文」や「夢」に見出^{みいだ}している。
- ② Aは、文字というものがあるからこそ遠い時代や遠い地域まで情報が伝わるのだとして、文字の存在を高く評価している。
- ③ Bは、古歌を踏まえる表現を多用し、「夢」が和歌の伝統的表現の中で重要な意義を有するものだと言っている。
- ④ AもBも古い時代の文学作品の表現を踏まえて意見を述べることで自説の説得力を増そうとしている。
- ⑤ 日常の世界とは別次元に思いを馳^はせることができる媒体として、Aは「文」に注目し、Bは「夢」に注目している。